

Mrinalini Sinha, Specters of Mother India: The Global Restructuring of an Empire

著者	栗屋 利江
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	8
ページ	83-88
発行年	2007-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00007334

Mrinalini Sinha,

*Specters of Mother India :
The Global Restructuring of
an Empire.*

Durham and London : Duke University Press,
2006, xiii + 366pp.

あわ や とし え
粟屋 利江

I

インドの著名な社会人類学者ヴィーナ・ダースはある論考のなかで、キャサリン・メイヨ (1867~1940) の『マザー・インディア』(1927年) を「インドについて書かれた最も悪名高い書のひとつ」と評している [Das 1990, 212]。南アジア近代史を学ぶものにとってはあまりにも有名な同書と、同書が引き起こした大論争を素材としつつ、1919年から35年の戦間期の政治・社会を分析したのが、ここで取り上げるムリナリニ・シンハによる最新書である。

ムリナリニ・シンハは現在、ペンシルヴァニア州立大学教授であり、南アジア近代史・ジェンダー史研究で異彩を放っている南アジア系研究者である。彼女の名前を有名にしたのは、*Colonial Masculinity: The 'Manly Englishman' and the 'Effeminate Bengali' in the Late Nineteenth Century.* (Manchester and New York: Manchester University Press, 1995) だといってよいだろう。同書は、帝国主義支配およびナショナリズムを支えるイデオロギーとしてジェンダー言説、この場合「男性性」という言説が決定的な機能を果たしたことを鮮明に描き出した。そこでも、帝国と植民地との関係をメトロポリスと周縁という構造を超えて、よりグローバルな関係性のなかで捉えようとする視角は示されていたが、本書はその傾向をより強め、さらに、女性のエージェンシーに焦点が当てられる。

II

本書の構成は以下のとおりである。

- 序章 事件 (event) の分析
 第1章 過渡的モメント——戦間期の帝国主義的
 社会構成体のダイナミズム——
 第2章 予想不可な結果——間大西洋介入の軌跡
 ——
 第3章 アイロニックな反転——『マザー・イン
 ディア』論争における「事実」のレトリ
 ック——
 第4章 母なるインドを再造形する——シャル
 ド法と女性の集団的エージェンシー——
 第5章 不確かな事後経過——第2次大戦前夜の
 政治的統合——
 エピローグ

極めて多岐にわたる内容と緻密かつ射程の長い論点が盛り込まれているために、要約は至難の業であるが、以下に各章の要点を紹介する。

序章では、理論的、概念的な議論とともに、本書の全体像が大まかに示される。まず、『マザー・インディア』論争には、グローバルな公的事件という位置づけが与えられる。さらに、メイヨがインド人の統治能力の欠如を証拠づけるものとして示した「事実」は、植民地インドにおける既存の「社会的なるもの」と「政治的なるもの」との関係を根本から転換させる結果を導いたこと、論争とほぼ同時期に起こった「幼児婚抑制法」(通称シャルド法)の成立を目指す女性組織によるキャンペーンを通じて、宗教コミュニティの集団アイデンティティから独立して、レトリカルなレベルで女性の集団的エージェンシーが創出されたこと、しかし、メイヨ論争後の政治的その他の状況の変化によって、その可能性が閉ざされた、という論点が大きな流れとして示される。シンハは分析の枠組みとして「帝国主義的社会構成体」(imperial social formation)を提唱する。シンハは、この概念を広義の「近代社会の帝国主義的秩序」ともいい、さらに、文化的、政治

的、経済的な要素の相互関係を内包するものであると付言している。

第1章は、『マザー・インディア』論争の広がりと言義を決定づけた諸局面について概観する。今日まで続く同書の影響力は、単にサイドのいうオリエンタリズムの一環として解釈されるべきでなく、1920年代という歴史的転機の文脈のなかで検討されるべきであることが強調される。特に指摘されているのは第1次大戦後の帝国主義政策のグローバルな変貌であり、具体的にはイギリスの相対的な地位の低下と、一方でアメリカ資本の台頭、インドへの接近である。また、インド人への一定の権力の移譲を迫られたイギリス、フィリピン支配政策をめぐる議論やアジア系移民問題を抱えたアメリカの事情が素描される。さらに、同時代にインド女性をめぐる言説にも変化が生じたことが指摘される。たとえ文化ナショナリズムの言説によって西洋とは「異なった」インド文化の真髄、シンボルとしての役割を課せられ制約を受けたとはいえ、全国的な女性の組織化、ガンディー指導下の民族運動の登場、プリント・カルチャーの発展、憲政改革を契機とする女性参政権運動の開始などによって、ミドル・クラスのエリート女性たちは、権利を有する主体といった自由主義的政治言説の担い手として公的領域に進出していった。

第2章では、アメリカ人ジャーナリストであるメイヨがなぜインドにかかわることになったかが、イギリスの対アメリカ情宣活動、ロックフェラー財団などのアメリカ資本の動向、帝国主義的、人種差別的偏向をすでに示していたメイヨの文筆活動の内容分析から跡づけられる。すでにジャーの先行研究 [Jha 1971] でも明らかにされていたように、『マザー・インディア』出版の背景に、非公式とはいえ、イギリスの関与があったことが論証される。

第3章は、『マザー・インディア』論争の「厚い記述」(thick description, p.65)を行う。メイヨは、性的過剰なインド(ヒンドゥー)文化——それを証明するのが、たとえば、幼児婚、幼年での出産などであった——がインドのあらゆる問題の元凶であるとし、このような文化的に後進的なインドは自治能

力を欠くというレトリックを駆使した。このレトリック自体は目新しいものではなかったが、メイヨは議論を正当化するために、誇張された描写の生々しさとともに政府統計や証言を「事実」として前面に打ち出した。『マザー・インディア』出版直後にイギリス、アメリカ、インドで巻き起こった大論争はインドにおける女性の状況に対して大きな関心を呼び起こしたが、「事実」をめぐるのは、メイヨの意図しなかった方向に議論は展開していった。メイヨへの批判者ですら、彼女の提示する「事実」自体についてはある程度認めながら、インド本来の文化にではなく、イギリスの植民地支配に諸問題の原因を求めたのだった。こうして、それまで近代化の担い手としてインド支配を正当化していたイギリスのレトリックは崩れ、むしろ、イギリス支配こそがインド近代化の障害であるという視座が地歩を確立することになった。

第4章は、1929年のシャルダ法成立までの過程を追う。同法は、宗教コミュニティの区別なく適用される法律であることが大きな特徴であった。女性組織によるキャンペーンは、同法の成立に大きな役割を果たした。キャンペーンを通じて「社会的なるもの」と「政治的なるもの」の統合が起こり、また、コミュニティ・アイデンティティに埋没させられてきた女性がそのくびきから解放され、権利を有する個人としての女性、個々のコミュニティを横断する女性の集団的エージェンシーが立ち現れ、その結果、それまでの「女、コミュニティ、国家」という等号の図式は挑戦を受けることになった。

第5章では、メイヨ論争後、1930年代のインドにおける憲政改革と同時進行した第2次女性参政権運動の紆余曲折が分析される。インド政治の表舞台においてコミユナル問題(コミュニティ別代表制)が解決をみない状況下、エリナー・ラスボーンを代表とするイギリスの帝国主義フェミニストの干渉によって、シャルダ法案キャンペーン期に頂点に達したインド女性の集団的エージェンシーに亀裂が走り、再び「社会的なるもの」と「政治的なるもの」の分離が起こった。女性組織の主流が、女性への特別措置を廃した成人普通選挙の要求に専心した結果、ム

スリム・メンバーたちの離反、疑念を生み、最終的には意図せず、改革後のインド国民国家の市民を、ヒンドゥー、ミドル・クラス、男性と前提するドミナントな政体の確立に寄与することになった。

「エピソード」は、1957年制作の大ヒット映画『マザー・インディア』から説きおこし、同映画は、母なるインドという「妖怪」が再びナショナリズムの企図に奉仕し^(註1)、また、歴史的事件としてメイヨ論争が持った意義を捨象し、事件から「神話」への転化を固定化したと指摘する。そして、本書のねらいが『マザー・インディア』論争を戦間期の帝国主義的社会構成体における断絶の瞬間 (a moment of rupture) として提示することにあつたことが再確認される。その断絶の間隙をぬって、さまざまな集団の内部に囲い込まれていた女性が、一時的にせよ、新たな政治アイデンティティを獲得したのであり、この確認は、今日『マザー・インディア』論争が国民的記憶のなかで、帝国主義的中傷者に対するナショナリズムの抵抗として「神話化」されている状況と、論争時期の政治的移行の意義を無視する既存の歴史叙述を穿つことだとする。

III

本書はシンハが1990年代から発表してきた諸論考 [Sinha 1994; 1996; 1997; 1998; 1999a; 1998b; 2000] の集大成ともいえる。シンハによれば、『マザー・インディア』論争へのインド人フェミニストとしての関心は、論争のなかで客体として扱われているインド人女性の主体を再構築しようとする試みから生まれたという [Sinha 1994, 478-479]。これらの論考を読み返してみるならば、シンハの思索の深化、用語上の変化を跡づけることができる^(註2)。

シンハは本書のなかで、主流となっている解釈に抗う刷新的な切り口を提示している。まず、1930年代の女性参政権拡大をめぐるインド女性陣営内部での対立についてである。シンハは、女性への優遇措置を受け入れるか否かの選択には、通常的自由主義フェミニズムのジレンマ、すなわち「平等」を求めると同時に「差異」も主張するという二律背反とい

うよりも、コミュニナリズム (宗派主義) に巻き込まれ、女性がコミュニティのシンボルとして再びコミュニティ・アイデンティティのなかに埋没するか否かが賭けられていたとみる。これまでのインドにおける女性参政権研究が大方、まずは女性有権者を増やすことによって女性の「地位の向上」を志向する立場と、男性との「平等」を原則として追求する立場との対立として理解してきたことを思い起こすならば斬新な視角である。しかし、個々の女性たちによって、いずれの課題が一義的な目標として切実に自覚されていたかは、意見がわかれるところであろう。成人普通選挙という、会議派に極めて近い選択には、すでに、無意識的に「ヒンドゥー」を透明化するスタンスが存在したという批判が行われる余地は今でも残る。

視角としては関連している第2の論点は、市民権の系譜に関する見解である。シンハは、植民地インドにおける権利、市民権といった概念をめぐる通常の自由主義的経路ではない、別の系譜を提示する。フェミニズム、ポスト・コロニアル批評はともに、白人、ミドル・クラス、男性中心の市民権理念の排他性を批判してきた。また後者は特に、植民地支配下での市民権主張に、西洋モデルからの「派生的」産物であるという評価を下す傾向があるように思われる。一方、シンハは、ことインド人ミドル・クラスの女性にとって市民的個人の権利主張は、植民地主義的社会学が固定化した「コミュニティ」に抗した、女性の集団的エージェンシーの結果として生まれたと主張する。つまり、女性がコミュニティ・アイデンティティと同一視されてきたことからの解放に、その基点と意義を認めようとするのである。ただし、この点についても、インドの女性運動が圧倒的に上流、上位カースト (ヒンドゥー) によって担われたことを考慮するならば、どのように系譜を解釈しようと、彼女たちの問題関心をどこまで非エリート的女性たちが共有したのかが問われなければならないだろう。

第3は、シンハの分析、主張は、チャタージーによる「女性問題のナショナリストの解決」という、批判を受けつつもなお大きな影響力を及ぼしている

定式化 [Chatterji 1989] へのフェミニズムからの批判ともいえる^(註3)。チャタージーの議論の骨子は次のようなものである。19世紀後半、イギリス支配に対抗する(男性)ナショナリストの企てのひとつは、文化領域を精神的と物質的、家(home)と世界(world)へと二分化し、後者の領域においてはヨーロッパ文明の優越を認めつつも、前者の領域に関してはインド人(男性)の自律的領域として堅持することであった。前者の精神性を体現する存在が女性であるとされた。女性の地位の近代化が完全に否定されたわけではなかったが、あくまで守るべき真正なインドの精神性に抵触しない範囲で外部からの干渉なしに行われるべきであった。

チャタージーの議論は、文化ナショナリズムのジェンダー化された性格を指摘した点で重要である。しかし、文化ナショナリズムの西洋との「差異」に注視するばかりに、あたかも、精神性/物質性という分化や、西洋に「優越する」精神性のシンボルとしての女性像という図式が、固定的かつ、一貫してヘゲモニックであったかのような印象を与える。メアリ・ジョンも指摘するように、チャタージーの定式化は、20世紀初頭に始まるエリート女性による女性運動の組織化について明示的なコメントを加えていないのであり、こうした女性の地域・全国組織による活動は、「女性問題のナショナリストの解決」の枠内にあるとし、それらに参集した女性たちの固有のエージェンシーは過小評価されるか、インド・ナショナリズムと同様に西洋近代起源の「派生的」なものともみなされているようである。シンハは、インド女性の公的領域での多様な活動に光をあて、その射程をコミュニティと女性との関係から再定義することによって、チャタージーの「19世紀、20世紀のヨーロッパやアメリカの女性運動とは違って、ナショナリズム期の(インドにおける)女性に関する新しい概念をめぐる闘いは家庭内で闘われた」[Chatterji 1993, 133]という理解の偏狭さを示す(たとえば、p.44, 51, 253など)。

全体を通じて印象的なのは、シンハの論の進め方の非決定論的な性格である。議論は単純な因果関係的な説明を避け、言説・レトリックと現実、選択・

エージェンシーと制約、意図と不可知性との間で微妙なバランスをとりつつ進められていく。特に、「意図しなかった」(unexpected), 「予期できなかった」(unpredictable), 「偶発的」(contingent)といった形容詞が多用されることで、歴史の各局面が内包する、諸主体にとっての外在要因の交差が強調され、また「そうなる必然性はなかった」(need not have been), 「不履行の結果」(by default)といった表現によって、存在した選択肢の複数性が示唆されている点も、本書の特徴のひとつである。その結果、性急な読者は、「一体、どのような選択肢があったと著者は考え、どれを良しと考えているのか」といった疑問を抱いたまま残されると同時に、読者自身の思索が刺激される。こうした記述は、歴史記述の実験的、挑戦的な試みであり、ある意味、歴史家の仕事をめぐって自省を促す効果を持つように思われる。ここで付言するに値するのは、シンハが女性組織のスタンスを表現する際に繰り返し使っている「闘争的な自由普遍主義」(agonistic liberal universalism)という用語である^(註4)。ここでシンハが意図しているのは、評者の理解する限り、一定の普遍主義を認めながらも、それが所与のものとしてすでに存在するのではなく、特定の歴史的状況のなかで、ある主体が模索する何ものかとして捉えようということであるように思われる。

極めて多角的かつ重層的な分析にもかかわらず、やはり、奇妙に抜け落ちていると思われる要素もある。たとえば、女性運動に与えたガンディーの絶大な影響^(註5)、あるいは1930年代の社会主義思想の広まりなどが挙げられよう。いずれも、規範的な「市民」、「国民国家」、「権利」といった概念に根本的な介入をした要素であろう。また、やはり残念なのは、分析対象がもっぱらエリート・レヴェルに限られていることである。シンハの力量をもって、本書が焦点を当てた社会階層によって排除される結果になった、いわゆる非エリートの世界に光をあて、本書における議論との有機的結節を描く作品を近い将来に期待したいところである。

なお本書には、本文250ページ強に対して80ページの注が付されている。この長大な注は、著者が膨

大な一次資料に依拠していることを示しているのみならず、広範なテーマに関する先行研究を列挙しており、各テーマの初歩的な文献リストとしての意義は少なくない。

IV

本書は既述したように、女性のエージェンシーというフェミニズム研究が徹底的に追求してきたテーマに、インドの経験から新たな次元を付与した。また、『マザー・インディア』論争という一事件から、帝国、ネイション、コミュニティを縦横に駆け巡って議論を展開する本書は、ジェンダー化されたグローバル・ヒストリーの可能性を示す好著ともいえよう。

1990年代以降のインドにおいて、「カースト」、「宗教」を単位とした政治動員が顕著な現象となっている。こうした状況下で、女性と集団アイデンティティの問題が再浮上し、これは、女性に議席を留保することを目指す法案（1996年）をめぐる論争のなかにも象徴的に現れている。この論争が再び、将来、「そうなる必然性はなかった」という評価がなされるような決着をみることになるのか、シンハの問題提起は、すぐれて現代的な意義を有すると思われる。

(注1) インド・ナショナリズム運動の過程で、インドという国、国土は、しばしば母親(あるいは女神)としてジェンダー化されて表象された。メイヨがこの事実を踏まえて書名に『マザー・インディア』を選択したことは、極めて扇動的な意味合いを持った。

(注2) たとえば、ウマー・ネルーのメイヨ批判に対する評価は、Sinha (1996) から大きく変化している。注4も参照のこと。

(注3) チャタージーの議論をさらに展開した論考にはChakrabarty (1993) が、チャタージー、チャクラボルティの議論にたいする批判には、Sarkar (1997)、Bannerji (2000) などがある。

(注4) ちなみに、Sinha (2000) では、単に自由主義フェミニズム (liberal feminism) という表現が使用されていた。

(注5) たとえばメアリ・ジョンは、女性たちが留保議席などの女性への優遇措置を「反国民的な裏切り」とみなすようになった要因としてガンディーの個人的な影響を重視している [John 2000, WS-24]。たしかに、シンハはガンディーの影響を全く無視しているわけではないが (たとえば, pp.47-48), 議論の主要な核とは位置づけていない。

文献リスト

- Bannerji, Himani 2000. "Projects of Hegemony: Towards a Critique of Subaltern Studies' Resolution of the Women's Question.'" *Economic and Political Weekly* 11-17 March: 902-920.
- Chakrabarty, Dipesh 1993. "The Difference-Deferral of (a)Colonial Modernity: Public Debates on Domesticity in British Bengal." *History Workshop Journal* 36 (Autumn): 1-33.
- Chatterji, Partha 1989. "The Nationalist Resolution of the Women's Question." In *Recasting Women: Essays in Colonial History*. eds. Kumkum Sangari and Sudha Vaid. New Delhi: Kali for Women.
- 1993. *Nation and Its Fragments*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Das, Veena 1990. "The Imaging of Indian Women: Missionaries and Journalists." In *Conflicting Images: India and the United States*. ed. S. R. Glazer and N. Glazer. Glenn Dale: The Riverdale Company.
- Jha, Manoranjan 1971. *Katherine Mayo and India*. New Delhi: People's Publishing House.
- John, Mary E. 2000. "Alternate Modernities?: Reservations and Women's Movement in 20th Century India." *Economic and Political Weekly* October 28: WS-22-29.
- Sinha, Mrinalini 1994. "Reading *Mother India*: Empire, Nation, and the Female Voice." *Journal of Women's History* 6 (2)(Summer): 6-44.
- 1996. "Gender in the Critiques of Colonialism and Nationalism: Locating the 'Indian Woman.'" In *Feminism and History*. ed. Joan Wallach Scott, Oxford

- and New York : Oxford University Press. 477-504.
Reprinted from Ann-Louise Shapiro ed., *Feminist Revision History*, 1994.
- 1997. “Teaching Imperialism as a Social Formation.” *Radical History Review* 67 : 175-186.
- 1998. *Introduction to Selections from Mother India*. New Delhi : Kali for Women.
- 1999a. “Suffragism and Internationalism : The Enfranchisement of British and Indian Women under an Imperial State.” *The Indian Economic and Social History Review* 26(4) : 461-484.
- 1999b. “The Lineage of the ‘Indian’ Modern : Rhetoric, Agency, and the Sarda Act in Late Colonial India.” In *Gender, Sexualities and Colonial Modernities*. ed. Antoinette Burton. London and New York : Routledge. 207-221.
- 2000. “Refashioning Mother India : Feminism and Nationalism in Late-Colonial India.” *Feminist Studies* 26(3)(Fall) : 623-644.
- Sarkar, Sumit 1997. *Writing Social History*. Delhi : Oxford University Press.
- [付記] 関連文献の収集にあたっては、東京大学大学院総合文化研究科博士課程宮本隆史氏、同人文社会系研究科博士課程栗田知宏氏にお世話になった。この場を借りて感謝したい。
- (東京外国語大学外国語学部教授)